

黒毛和種繁殖農場における飼養環境改善による子牛肺炎と中耳炎対策

西播基幹家畜診療所

○平岡 晃哲 宮崎 俊輔 菅 保礼 玉井 登 平井 武久 森本 啓介

子牛の肺炎および中耳炎が多発した黒毛和種繁殖農場において、月齢別で少頭数に群分けする飼養区画整備と煙霧消毒の実施により事故を低減できた。

材料および方法

対象農場：黒毛和種繁殖母牛を約 30 頭飼養する農場で、2013 年 8 月までは、出生後 7 日間分娩房にて母子同居、8 日齢から 4 ヶ月間は、母牛は繋ぎ飼い、子牛は母牛後方のスペースに一群で飼養されていた。

事故発生状況調査：2010 から 2015 年に出生した子牛 157 頭について、病傷事故記録より疾病発生件数、肺炎および肺炎にて中耳炎を併発したものは発症日齢と治療回数を調査した。また、中耳炎を発症した子牛 2 頭に病理解剖および細菌検査を実施した。

事故低減対策：2013 年 9 月より、一群管理していた 8 日齢以降の子牛を 4 区の飼養枠に分け、1 区内の子牛飼養は月齢をそろえた 3 頭までとした。さらに、牛舎内の煙霧消毒を 3 日に 1 回実施した。

結果

出生頭数は 2010 から 2015 年まで順に 30, 29, 21, 27, 21, 29 頭であった。疾病発症延べ頭数は 25, 28, 13, 24, 14, 24 頭で、その内、肺炎頭数は 9, 7, 7, 14, 12, 9 頭であった。また、肺炎で中耳炎を併発した頭数は 0, 1, 3, 8, 6, 2 頭であった。肺炎の平均治療回数は 3.2, 3.0, 3.3, 10.1, 4.9, 4.3 回で、2013, 2014 年では治療が 30 回を超える症例も認めた。肺炎（中耳炎併発）の出生後最短発症日齢は 105（なし）、31（77）、15（48）、25（25）、18（27）、40（163）日であった。

病理解剖では 2 ヶ月齢子牛に肺および左右鼓室胞の膿汁貯留、12 ヶ月齢子牛に右内耳孔に形成された膿瘍による右側小脳および延髄の圧迫が認められた。細菌検査では両子牛から病変部位より *Mycoplasma bovis* が検出された。

考察

肺炎および中耳炎は 2013 年に多発し、発症の若齢化、平均治療回数の増加を認めた。これは、日齢の大きく異なる子牛との同居が若齢の子牛にとって大きなストレスとなり、疾病発症の誘因となったためと考えた。2013 年の対策以後、2015 年には発症日齢が延長し、治療回数の減少を認めた。これは、飼養区画整備と定期的な牛舎消毒によって、飼養環境が改善され若齢子牛へのストレスが軽減されたことと、農場主の子牛の個体管理や観察が容易になり疾病の早期発見につながったことによるものと考えられた。